

「教育ママ」言説における母親像の変容

1962-1980 年の『読売新聞』を事例に

池本紗良

1. 本研究の主題

2006 年 12 月の教育基本法の改正において、第 10 条に「家庭教育」に関する独立規定が設けられ、「父母その他の保護者」の「子の教育の第一義的責任」が明記された。この改正教育基本法を受けて、文部科学省は 2008 年に教育振興基本計画を発表した。この計画のなかで「重点的に取り組むべき事項」として「家庭教育支援」が挙げられると、2012 年には「つながりが創る豊かな家庭教育」、2017 年には「家庭教育支援の具体的な推進方策について」が報告された。こうした報告書では、貧困家族への支援を念頭に「すべての親」を対象にした親への啓発を促すことが課題として設定されている。その前提として語られるのが「家庭の教育力の低下」である。

この「家庭の教育力の低下」は広田照幸(1999)をはじめ、多くの論客によって、その妥当性が問われ続けている。広田(1999)は「家庭の教育力の低下」言説が、1980 年代の臨時教育審議会を機に誕生したと見ているが、実はそれ以前の政策文書にもその片鱗が見て取れる。たとえば、1952 年の『問題青少年の理解と指導』(文部省初等中等教育局)では、「多くの非行性行為や不良行為を行う青少年は、両親、特に母親から愛されていないと感じている場合が多い」と述べられ、「正しい健全な家庭教育」を施すことが望ましいとされた。1963 年の『児童福祉白書』(厚生省児童局)においても、当時の日本が「子ども天国」と称される一方で、実際には「保育の欠如や少年非行の増加率、自己による死傷率」が世界でも群を抜いて高い「危機的段階」にあることが問題視された。この「危機的段階」の打開策として、親子の団らんを楽しむことや過大な期待をかけないことといった、家庭における親の役割が示された。以上の政策文書に表れているように、1960 年代の高度経済成長期においても家庭の教育力の底上げが喚起されていたことがわかる。

一方で高度経済成長期は、進学ブームが沸き起こり、「教育ママ」という言葉が新聞や雑誌で頻出するようになった時代でもあった。母親たちは子どもの進学に強い関心を抱きはじめ、わが子の成績を伸ばそうと学習塾に通わせたり、学校に干渉したりする「過保護」が社会問題化した。こうした母親の教育熱心さを揶揄する言葉として、「教育ママ」という言葉が使われたのである。

では教育へのアスピレーションが高まった高度経済成長期、家庭教育やその担い手についてのイメージはどのように形成されてきたのか。本研究の主題は、『読売新聞』の記事を分析対象に、家庭教育の担い手としての母親像がいかに変容してきたのかを分析することにある。この分析は、今日喧伝されている家庭教育論がいかなる意味合いをもっているのかを再考する材料となるであろう。

2. 本研究の背景と課題

高度経済成長期は、「家族の戦後体制」(落合 1989, 1994)や「家族の 55 年体制」(岡本・笹野 2001),「戦後家族モデル」(山田 2005)と称されるように,近代家族の体制が完成した時代であった。高度経済成長期の家族体制の特徴として,「都市・雇用者・核家族の中で『夫は仕事・妻は家庭』の近代型性別役割分担が完成し,大衆化した」(上野 1990:197)ことが挙げられる。家庭領域に囲われた女性は,自らの生きがいを子どもの教育に見出し,教育へのアスピレーションが高まっていった。

高度経済成長期の教育する母親を対象とする研究のなかには,当時の母親の教育態度を分類した類型論(二関 1971; 神原 2004)や,母親の教育熱心になる要因について指摘した原因論(重松 1962; 本田 2000)がある。たとえば本田由紀(2000)の研究は,「教育ママ」の特徴を母親たちのライフコースから詳らかにすることを試みている。彼女らは,きょうだい数や家庭の生業,居住地,学校教育経験,夫の就業形態の面で,大きな変化に直面した世代であり,その前後の世代との断層があったために,従来の子育て規範や慣習を踏襲できなかったという。それゆえ学業達成というわかりやすい指標に頼る「教育ママ」が誕生したと結論づけた。こうした「教育ママ」を対象にした研究は,母親の教育への傾斜が本能に基づくものというよりも,社会の情勢に応じた役割であったことを示した点で示唆に富んでいる。

ただし先行研究は,「教育ママ」が実在したことを暗黙の了解としているために,当時の母親をとりまく状況が一元的なものとして捉えられかねない点,家庭教育の担い手として女性が位置づけられた意味を検討するのが主題ではなかった点など,課題が残っている。そこで本研究では,「教育ママ」を実態的に捉えるのではなく,言説空間で語られた母親イメージとして検討していく。すなわち「教育ママ」言説を,母親を一定の型にあてはめて統制する言説であると同時に,母親自身がその言説にふれて,自らの行為や自らをとりまく環境を省みる資源でもあるという見方を採っていく。というのも「教育ママ」言説は,望ましい母親の教育役割を示す社会的規範と,現実に行われていると思われた母親の教育行為のせめぎあいの場でもあり,そこから母親をとりまく多彩な状況を看取できるからだ。

したがって本研究は,「家族の 55 年体制」が成立していた高度経済成長期に,だれに家庭教育の責任や役割が課されたのか,そしてどのような家庭教育が提唱されていたのかを「教育ママ」言説を通して明らかにしていく。具体的には,当時の社会的状況を表す変数として高校進学率と女性の就業率に注目し,その推移と「教育ママ」言説はいかに関連しているのか,言説の内実はどのように変容していったのかを分析するのが作業となる。

3. 分析内容

(1) 分析データ

分析の対象となるのは,1962 年から 1980 年までの『読売新聞』において,「教育ママ」という言葉が登場した記事のすべてである。『読売新聞』の検索機能「ヨミダス歴史館」を用いて,「教育ママ」やそれに類する語が現れた記事(361 件)を「教育ママ」言説とした。『読売新聞』は 1960 年代以降,購読者数が安定して多かった大衆新聞であるため,一般に

受けとり易い「教育する母親」像が描かれていたと考えられる。

（２）「教育ママ」言説の総数の増減

最初に「教育ママ」言説の増減を確認することで、分析に役立つ時期区分を設定する。図1が示しているように、「教育ママ」言説は1962年に初めて登場して以降、1968年まで一気にその件数を増やしていった。しかし、1968年をピークに右肩下がりの軌跡をたどる。

「教育ママ」という言葉は特に1960年代後半、まさに高度経済成長期のただなかに頻出した言葉であったことがわかる。1960年代後半に、教育に強い関心を示す母親が新奇のまなざしにさらされたのだ。1975年に再度盛り上がりを見せるものの、それ以降は新奇性を失い、語られなくなっていく。

したがって「教育ママ」言説が誕生し、急増した1960年から1968年までの間を第Ⅰ期、「教育ママ」言説が定着するも、その数が緩やかに減少していった1969年から1975年までを第Ⅱ期、「教育ママ」言説の新奇性が失われ、減少していった1976年以降を第Ⅲ期とする。

記事数の推移は、高等学校の進学率や女性の就業率と対応していることも観察できる。高等学校の進学率は、1962年には64.0%であったのが、10年間で急激に上昇し、1975年には91.9%となった。それ以降、「高卒当然社会」（香川ほか 2014）が到来し、だれでも高等学校に通える社会になっていった。また女性の就業率についても、1975年が1つの契機となっていることがわかる。1960年代、性別役割分担の慣行のもと、女性の専業主婦化が進んでいったが、1975年を起点に女性の就業率が増加していった。母性愛神話や三歳児神話が興隆したのが1970年代であったが、1970年代後半になるとそうした神話が疑われ始めた時期であったことも関係しているだろう（宮坂 1999）。

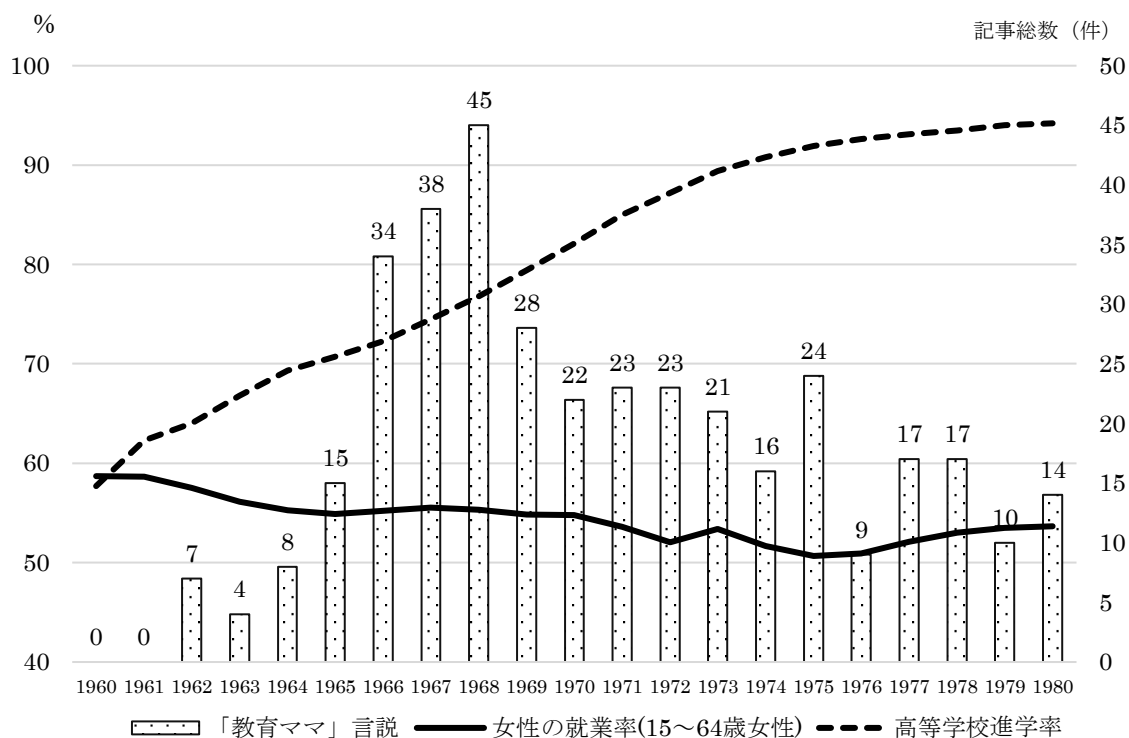


図1 「教育ママ」言説数と高等学校進学率・女性の就業率の推移

(3) 「教育ママ」言説の意味内容の変質——どのような家庭教育が提唱されたのか

では、「教育ママ」言説によって、語られる母親はどのような母親であったのか。「教育ママ」はけっして同一の文脈で語られたわけではなかった。にもかかわらず、さまざまな母親が「教育ママ」という言葉で一括して語られたのである。そこで、361件の新聞記事を概観し、描かれた母親を6つの母親カテゴリに分類した。

まず①《受験・勉強》の母親カテゴリである。共起表現として、「入学試験」や「越境入学」、「学力テスト」などが挙げられる。2つめのカテゴリは、②《個性尊重・しつけ・親子関係》を損なった母親を指す場合である。具体的には、子どもの個性を無視した母親、しつけがなっていない母親、いびつな親子関係を問題視する記事が当てはまる。3つめのカテゴリは、③《事件・非行》カテゴリである。この文脈は、母親が子どもを殺す殺人事件、逆に子どもが親を殺す殺人事件、母親によるテスト窃盗・贈賄などの奇行、子どもの非行問題などをセンセーショナルに報道した記事にみられる。4つめが、④《女性のライフスタイル》を営んでいない母親を「教育ママ」と批判する言説である。このカテゴリでは、「教育ママ」が子どもの問題としてではなく、女性の問題として描かれることが多い。すなわち「教育ママ」が子どもにとって悪影響を及ぼす存在であるばかりでなく、母親自身の人生を無為にしているとして、その見直しをせまる文脈がこのカテゴリに該当する。5つめのカテゴリとして、⑤《母親の態度》が挙げられる。ここでは、「教育ママ」という言葉が、教育の場面に留まらず、がみがみ文句がうるさい母親や傍若無人な母親を揶揄するときに使われることが多い。最後に、①から⑤までのカテゴリにあてはまらないものを⑥《その他》とした。このカテゴリには、「教育ママ」を例示として用いたり、世相を諷刺するとき用いたりした記事を内に入れた。また、テレビ番組や新書のPRでひきあいに出されるだけの「教育ママ」ということばや、有名人の紹介に使われた「教育ママ」ということばなども⑥《その他》にまとめた。この⑥《その他》カテゴリは、多様な文脈で「教育ママ」が使われていることを示唆してもいる。

361件の新聞記事をこの6つの母親カテゴリに分類した。ただしきれいに分類できるわけではなく、2つや3つのカテゴリにまたがって「教育ママ」が使われた新聞記事も確認された。特に、①《受験・勉強》カテゴリと、②《個性尊重・しつけ・親子関係》カテゴリが併発する記事が多い。こうした記事では、勉強中心の家庭教育の在り方を否定し、個性を尊重した学習やしつけ、温かい母子関係を築くことを推奨する論調となっていた。たとえば、1964年2月6日の「IQ その正しい利用法」という記事は、IQのしくみも知らずにその数値だけに執着する母親を「テスト・ママ」と呼び、「テスト・ママにならないために」IQの利用方法を伝え、「個性をのばすよう」な学習方法を推奨している。この記事は、①《受験・勉強》に熱心な母親を「テスト・ママ」と呼び、そうした母親は「子どもの個性」を疎外していると戒め、②《個性尊重・しつけ・親子関係》を志向するよう仕向けた記事である。こうした複数のカテゴリにまたがった記事については、「教育ママ」やそれに類することばが、そもそもどのような母親を指示しているのかを重視した。先の例を使って説明すれば、1964年2月6日「IQ その正しい利用法」の記事は、①《受験・勉強》のカテゴリに分類することにした。

この分類を用いて、「教育ママ」という言葉で、どのような母親が描かれることが多かったのか、その変容を辿ってみた。その結果を図2に示した。

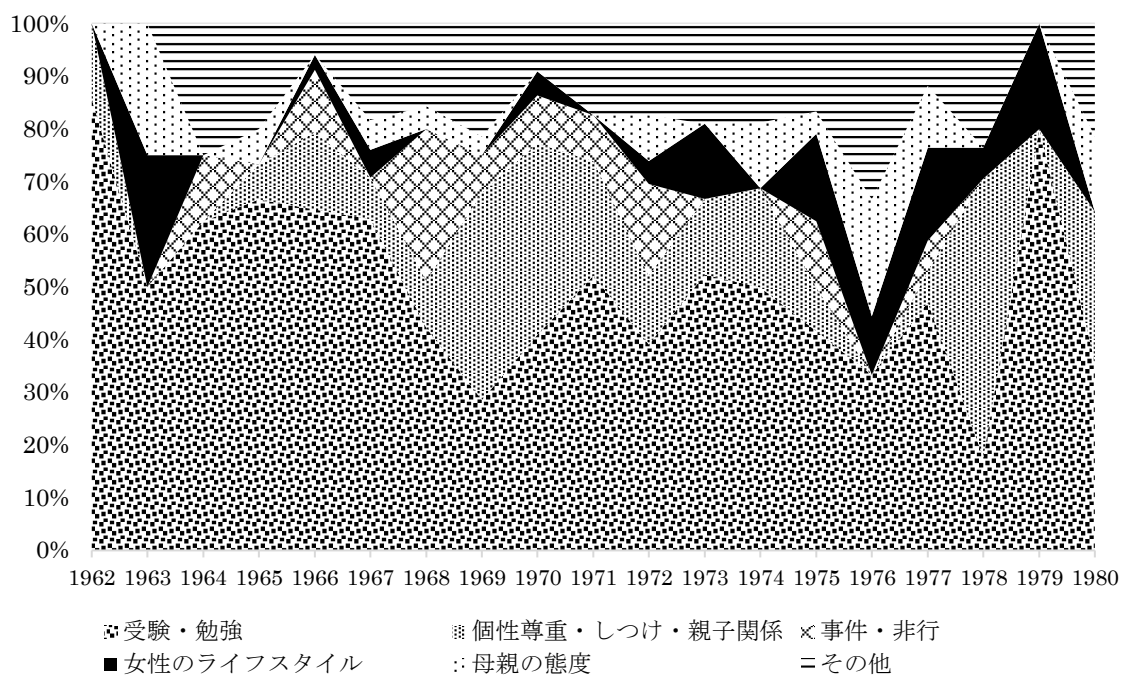


図2 「教育ママ」言説で描かれた母親の姿の変容（1962-1980）

図2をみると、「教育ママ」という言葉は、①《受験・勉強》に熱心な母親を指す言葉として頻用される傾向にあることが確認できる。特に1967年までは①《受験・勉強》で語られることが半数を占めていた。しかし、1968年には①《受験・勉強》カテゴリの割合がそれまでと比べて小さくなり、②《個性尊重・しつけ・親子関係》に配慮しない母親や、③《事件・犯罪》をする母親を指す、「教育ママ」言説の割合が相対的に大きくなった。1969年から1971年までは②《個性尊重・しつけ・親子関係》カテゴリが大きな割合を占めた。そして1972年以降、多様な母親を含意して「教育ママ」が語られることになった。特に1972年以降一定の割合で登場し始めたのが④《女性のライフスタイル》の観点から描かれた「教育ママ」言説であった。

この変容は、若干の時差があるものの、前項で設定した時期区分と対応している。第I期（1962-68年）は主として①《受験・勉強》に熱心な母親が「教育ママ」と表わされた。第II期（1969-75年）においては、子どもの受験や勉強に関する行為だけでなく、子どもの普段の生活への関わり方が過剰すぎる場合にまで「教育ママ」という言葉があてがわれた。さらに言うならば、その過剰さは②《個性尊重・しつけ・親子関係》を蔑ろにする母親であるという語られ方とセットになっていた。そして第III期（1976年以降）には、「教育ママ」と表される母親像が多様に描かれていた。つまり「教育ママ」という言葉が、ある特定の母親やその教育行為を指し示す言葉ではなくなり、符号的に使われることが多くなったのがこの時期である。よって「教育ママ」という言葉で批判される問題が、子どもの勉強や生活への悪影響だけでなく、母親の④《ライフスタイル》や⑤《態度》といった幅広い問題にまで波及していった。

(4) 「教育ママ」言説における評価対象——だれに家庭教育の責任が課されていたのか

次に注目するのが、「教育ママ」言説がだれを評価していたのかという問題である。これは、だれに家庭教育の責任が課されていたのかという問題と関与している。つまり評価の対象が母親自身なのか、それとも父親や学校、社会といった母親以外の存在なのかが分析のポイントとなる。加えてその評価がどのような評価であったのか、その変容も分析する。

この分析のために、新聞記事361件を概観した上で4つの評価カテゴリを見出し、分類を試みた。1つめの評価カテゴリは、①《母親への批判・要求・皮肉》という評価カテゴリである。「教育ママ」という言葉を、教育熱心な母親に対して批判的な評価を下し、その改善を求めるために使っている記事が当てはまる。だが批判の矛先が向けられたのは、母親だけではなく、「教育ママ」が、学歴社会の落とし子であり、諸悪の根源は社会や学校教育の在り方にあるという評価をする記事も登場した。また「父親の不在」が「教育ママ」を生み出しているというような論調で、父親の責任を喚起する記事もあった。以上のような記事は、2つめの評価カテゴリ、②《社会・教育界・父親への批判》として分類した。3つめの評価カテゴリは、③《名称・現象》カテゴリである。このカテゴリには、「教育ママ」という言葉が一現象を指し示す場合、単なる名称として使われる場合が当てはまる。すなわち「教育ママ」という言葉が意味中立的に使われている記事を、③《名称・現象》カテゴリとして分類した。最後のカテゴリが、④《良き母親》という評価カテゴリである。「教育ママ」は批判的な評価を下された母親を意味する言葉として登場したが、その教育熱心さが見直されてプラスの意味が付与される記事も出てきた。それが「本当の意味での教育ママ」や「真の教育ママ」といった表現である。こうした良い意味で「教育ママ」という言葉使われた場合を④《良き母親》と分類した。

以上、4つの評価カテゴリを設定し、新聞記事361件の分類を試みた。その結果を示したのが図3である。

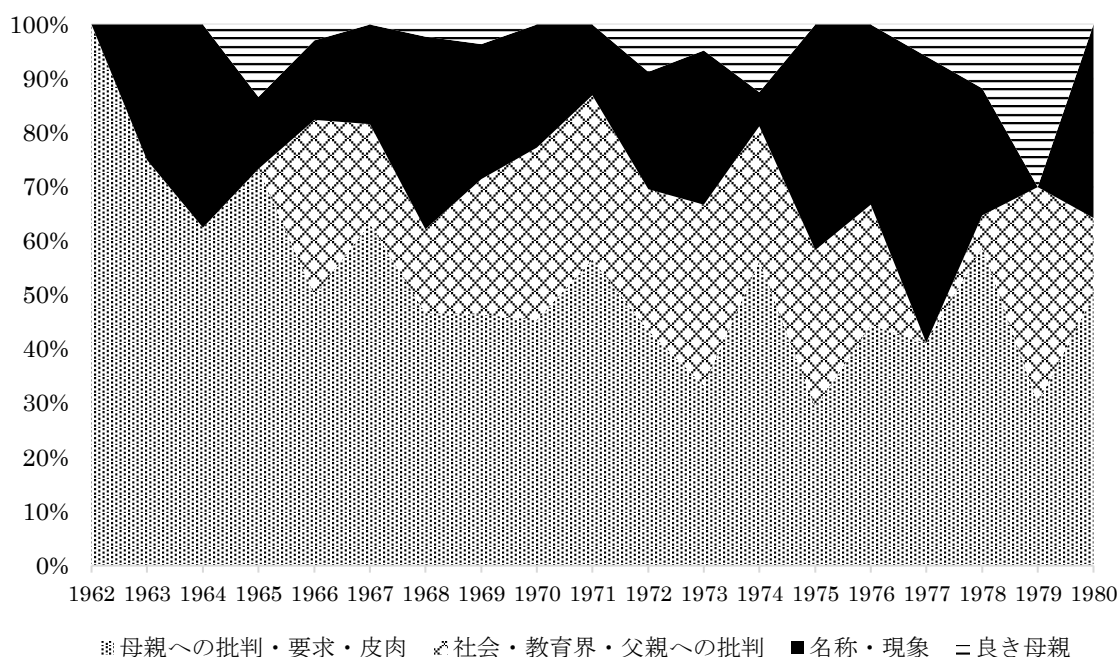


図3 「教育ママ」言説における評価の変化 (1962-1980)

図3から再確認できることは、「教育ママ」が母親への批判を意味する言葉として登場したことである。この母親への批判的な評価は、継続していることが見て取れる。けれども1966年になると、「教育ママ」という言葉は母親への批判だけでなく、社会や教育界、父親への批判にも使われていくことになった。また1972年以降、「教育ママ」への高評価もみられるようになっていく。それにともない、「教育ママ」に対する批判的な評価が相対的に減少していくことがわかる。

「教育ママ」言説における評価の変容にも、1962年、1966年、1972年の転換点があると判断できる。そしてこの転換点もまた、多少のずれがあるものの、先に設定した時期区分と一致していよう。第Ⅰ期（1962-68年）は、「教育ママ」の記事数が増加傾向にある時期であり、母親の責任を問う論調が主流となっている「母親への批判」の時期である。第Ⅱ期（1969-75年）は、母親への批判のまなざしは依然として健在ではあるものの、母親への同情もみられ、社会や教育界、父親に対する批判的な意見が語られ始めた「批判対象の複数化」の時期と重なっている。そして1972年には、「教育ママ」が見直され、母親の教育関心を肯定する評価も登場した。よってそれ以降は「評価の多様化」の時期であると考えられる。第Ⅲ期（1976年以降）がこの時期と対応している。

以上の変容をまとめたのが表1である。この表1から「教育ママ」という言葉によって描かれる母親や、その言葉で表される評価は、時期区分ごとに一定の傾向を帯びていたと理解できる。またこれまでの分析より「教育ママ」言説は、ただ単に母親を批判するだけでなく、母親への批判を通して、望ましい「教育する母親」像を構築していたことが示唆された。次に「教育ママ」言説で語られる母親の役割に注目し、いかなる「教育する母親」像が構築されたのかを析出することを試みる。

表1 「教育ママ」言説の変容

		第Ⅰ期（1962-68）	第Ⅱ期（1969-75）	第Ⅲ期（1976-）
言説	件数	誕生・増加	定着・緩やかな減少	符号化・減少
	母親の姿	受験・勉強	個性尊重・親子関係	多様化
	評価	母親への批判	批判対象の複数化	評価の多様化
社会 状況	進学率	急上昇期	上昇期	安定期
	就業率	減少期	緩やかな減少期	上昇期

5. 「教育ママ」言説にみる望ましい母親像の変容

（1）「教育ママ」言説誕生期のレトリック

「教育ママ」という言葉が『読売新聞』で初めて登場したのは、1962年8月23日の「学習じゅくの問題」という記事においてである。この記事は、「学習じゅく、進学じゅくのはらんぶり」に注目し、「このブームの推進役をした」のが「教育ママといわれる母親たちだ」と指摘する。そのうえで「子どもの生活はあくまでも学校中心で、じゅくは従のはず、じゅくの勉強に力を入れて、学校でアクビをすることにならないよう、これだけはおかあさんもじゅく経営者も心にとめてほしい」という「教師のゆずれぬ一線」が主張され、学校教育と家庭教育の役割の違いが語られた。こうした主張は、1962年9月19日「“学校まかせ”

でよいこと悪いこと “家庭学習”に熱中する親たち」という記事にも看取できる。この記事では「PTA ママやテストママなど教育ママ」は、「親も子供の勉強が教えられるようになっては」という考えや、『いい親』というのは子どもの勉強を教えられる親だ」という考えにまで「転回」した母親たちだと述べられた。そうした「転回」状況は『家庭学習』はあっても、子どもの家庭生活もそのなかでの家庭教育も、できなくなっている」状況だと警告され、母親は「家庭でしか教えられない生活の考え方や技術、人生のこと、愛情のこと——礼儀やエチケット」を教えるべきだと力説された。以上の記事からは、「教育ママ」という言葉は、学校教育に侵入してきた母親を「口うるさい母親」として批判し、家庭の本分を尽くすように奨励するために生まれたということが確認できる。そこから「教育ママ」言説が増加するにしたがって、越境入学させる母親や塾通いに熱心になる母親、成績・点数に関心を払う母親を「教育ママ」と呼び、揶揄する言葉になっていったと考えられる。

そもそも「教育ママ」という言葉が使われたのは学校と家庭を切り分けようとする意図があったこと、勉強にしか興味のない学力中心型の母親を指す言葉であったこと、そうした母親を批判する言葉として登場したことがわかる。すなわち、「教育ママ」言説は母親の教育アスピレーションを批判しながら、逆説的に家庭の本分を尽くす母親役割を主張するために誕生したと考えられる。しかしながら、家庭の本分の具体的な内容は語られず、単に学校教育への干渉を防ぐために使われた。誕生期の「教育ママ」言説は、子どもの学力形成は学校に一任し、それ以外のお世話をする家庭の本分に従事する母親役割を提唱するものであったといえる。

(2)「教育ママ」言説定着期の望ましい母親像

第Ⅱ期は、「教育ママ」言説が一定の頻度で現れるようになり、その言葉が定着した時期である。それ以前の「教育ママ」という言葉は、子どもの健康や体力には何の配慮もせず、受験に必要な教科にしか関心を示さないという学力中心型の母親を指す言葉であった。しかしこの時期以降、「教育ママ」という言葉で示される母親が、学力だけでなく、健康や体力、しつけといった幅広い分野にまで関心を示す母親へと拡張していった。たとえば1971年4月28日「体育教育 めざめる？教育ママ」では、体育教室に殺到する母親たちが、「学齢期のこどもは別として、小学生の場合、ふだんからこどものからだづくりの大切なことは知っているはずなのに、どうしても進学のための勉強が優先しがち。といってほうっておいてはほんとうにからだをダメにしてしまう。それに気がついた」母親だと指摘した。この記事から、「教育ママ」という言葉が、学力熱心な母親だけでなく、子どもに対して過保護な母親を指すようになったことがうかがえる。

上記のように、母親の過保護さを批判するために「教育ママ」が使われたほかに、「教育ママ」に別の意味合いが含まれるようになったのもこの時期のことであった。1970年10月23日の読者欄、「とうとう私も教育ママ？」はその一例である。この記事には、小学校2年生の子どもをもつ母親が、子どもに劣等感を抱かせないために、ついわが子の勉強に口をはさんでしまう葛藤が紹介された。その母親の「そのうちじゅくにもと考えると、親子の対話の時間も、家庭教育の時間も、ますますせばまってしまう。一步一步教育ママに近づいていくようで、われながらいやな感じがする。もっとのんびり育ててやりたいと思うが、やはり時代の流れに乗せてやらなければならないのだろうか」という言葉からは、「教育ママ」になることに嫌悪感を抱くも、時代の流れに鑑みれば、そうならざるをえないと認識してい

る姿が見受けられる。

こうした母親の姿勢の転換には、社会の「教育ママ」に対するまなざしが少しずつ変わってきたという背景がある。たとえば1969年6月30日「教育ママしかる前にあなたも反省しよう」という社説では、医師・児童評論家の松田道雄が、「教育ママというのが、子どもを名門校に入れようと熱心になっているお母さんのことだとしたら、教育ママは日本に官立の大学ができて以来いたはずです。なぜ、いまの教育ママだけがしかられねばならないのでしょうか」と「教育ママ」を擁護する論評が載せられた。また、教育心理学者・辰見敏夫による社説、1969年11月17日「教育ママ バンザイ!?!」では、「近ごろのように、家事が簡略化され、経済状態もよくなっていく、ということであれば、母親がその余力を子どもの教育に注入する、したがって教育に熱中するのは当然である。だから私は教育ママという表現に含まれるヤユとか非難は、不当だと思う」と語られた。いわゆる学者たちからは、「教育ママ」を見直し、母親だけに責任を求めるべきではないことが主張されていたことがわかる。

「教育ママ」が見直される以前の第I期終盤には、教育問題が「教育ママ」だけに責任があるのではなく、母親以外の責任主体が語られ始めていた。すなわち、批判対象が母親だけでなく、社会構造や教育制度、父親にも拡大していったのである。たとえば1966年6月20日「学校差の解消進めよ」という時評では、「有名中心主義が教育ママという異常な人々を生んで、その弊害が指摘されるようになってから久しい。しかしこれは単に高校入試の改革だけの問題ではなく大学から、否、社会からなおしていかなければならない問題である」という政治学者・中村菊男の意見が掲載された。子どもたちの「のびのびとした気持ち」を奪うのは、「有名校に入らないと一流大学へいけないというおろかなうわさが『神話』化され、親たちを刺激」するからであるという。

そして責任対象が学校側にもあるという指摘の一例には、1966年11月7日の読者欄、「小中学校教育に望む 低学年の試験なくせ」が挙げられる。この欄では「教育ママが流行し、母親が子供の自由を束縛しているようにいわれているが、私は学校の教育の仕方にも問題があると思う」という主婦の声が掲載された。

さらに多くなっていくのは、家庭における父親不在を問題視した記事である。1968年4月9日「教育“ママゴン”化は父親に責任」という読者欄では、母親が「教育ママ」となる「そもそもの責任は父親にあると思う」という読者の声が寄せられ、「今の父親は、夫としてもめんどろもかからないかわりに、たよりにもならない。世のパパ族しっかりしようぜ」といって父親の役割を喚起する記事が記載された。また1969年4月7日、小説家・遠藤純孝による社説、「教育パパやーい」では、「子どものことは一切教育ママまかせといった状態にあぐらをかくようになってしまった」父親の「無責任が、父親の愛を知らぬいびつな世代を作り上げる結果を招いた」という辛辣な意見が載り、父親に改心が迫られた。

母親に対して同情が寄せられ、社会や父親にも責任があるとみる見方が増えていく一方で、母親がなすべきこと、母親のあるべき姿がより明確に語られるようになっていった。1967年5月15日「子どものしあわせ願う 過重な期待かけるな」という読者欄では、「自由で自主性のある健全な成長」を推奨する会社員や、「ほんとうに子どもの幸せを考えるならば、むしろある程度厳しくしつけたほうがよいと思う」という学生、「親子の『対話』こそ必要」とする教員、「正しい愛情で健全な成長を」と述べる主婦、「もっと子どもの本質を人間性を大切にす」べきだという主婦など、読者の多様な意見が集められ、母親のあるべ

き姿が浮き彫りにされた。第Ⅰ期で提示された、学校とは異なる家庭の本分を尽くす母親の姿が継続して、そして第Ⅰ期より具体的に語られていることがわかる。

第Ⅰ期終盤から第Ⅱ期にかける「教育ママ」言説の特徴として、以下のことが指摘できる。まず勉強だけでなく体育や運動にまで射程を拡げた過保護な母親を「教育ママ」と批判するようになったこと、次に「教育ママ」にならざるをえない状況を認め、母親自身が「教育ママ」なるふるまいを肯定する言説がでてきたこと、「教育ママ」を見直す言説も登場し、母親にだけ責任があるのではなく、父親の責任、学校教育や社会構造のゆがみを原因とする論調も増えていったこと、そして最後に母親のなすべきこと、あるべき姿が明確に語られ続けたことである。表面的には教育の担い手が母親だけでなく、父親や社会にまでその責任が追及されながら、他方では母親自身が家庭教育の担い手としての役割を暗黙的に甘受していたと理解できる。また望ましい「教育する母親」像も「教育ママ」言説にて具体的に語られるようになった。わが子の個性や自主性を尊重し、健全な成長ができるようにしっかりと見守る役割が母親に課されていたのである。

(3) 「教育ママ」言説の符号化と新たな母親像の登場

第Ⅲ期は、「教育ママ」言説があまり見られなくなり、「教育ママ」と表わされる母親の姿があいまいになっていく時期であった。「教育ママ」が単なる符号として使われたこの時期には、多様な母親の在り様が指摘されるようになっていた。1977年4月11日「“自己教育ママ” “良妻賢母” 超えて社会とつきあう」では、主婦の話し合いの会に参加した哲学者・福田定良が「見ようによっては教育ママと呼べそうな人たちもいるが、一人ひとりの話を聞いていると、やはりこういう言葉で一括してしまう気にはなれない。(中略) しいて言えば、彼女たちは、時には教育ママと呼ばれかねないような仕方、国や社会のおかしな仕組みと付き合っている、ということになるだろう。子供を塾に通わせるのはおかしいと思っても、今の世の中はそういうものだと思って、つきあっているのである」という感想を述べた。続けて、こうした母親たちは「単なる良妻賢母ではいられなくなってきた」母親であり、「子供の教育にも熱心だが、他方、主婦業に携わりながら、自分のしたいことをし続けようとしている」母親であると論じた。福田はこうした母親たちを「自己教育ママ」と名付け、「現代の『新しい女』はもはや少数の知的エリートではなく、ごく普通の奥さんたちだという気がする」という希望を見出した。この福田の意見は、「教育ママ」と批判される母親のうちにも、自分自身の生き方に関心を抱いた「新しい女」たちがいることを指摘したものであった。

福田の指摘にも見られるように、この時期は女性の生き方が見直された時期であった。よってこれまで子どもに悪影響を与える存在として使われてきた「教育ママ」という言葉が、視野狭窄で独善的な女性の在り方を指す言葉としても使われるようになった。女性のライフスタイルの観点から「教育ママ」が批判されたのである。たとえば1975年6月23日の「キョウイク・ママ」という記事では、国際婦人年世界会議で「日本では母親の役割として“キョウイク・ママ”つまり“教育に熱心すぎる母親”が有名」と話題に上り、「家事中心の日本女性に『情緒の貧しさ』がある」と指摘されたことが紹介された。また1975年8月24日「編集手帳」では、「ビジネスウーマンとしての自覚がない、短大卒より年をとっているのに給与は割高なのに、すぐ結婚退社、在職年数は2～3年と短い」大卒女性が、「家庭に埋もれ、教育ママ集団に変身してゆくことは、会社にとってマイナスを防いでも、社会

にとってはプラスとはいえない」と論及された。以上の記事からは、国際婦人年世界会議に触発され、「教育ママ」的な生き方が批判されたことがわかる。そして「教育ママ」的な生き方は、母親にとってもマイナスであるばかりではなく、社会にとってもマイナスの影響を及ぼすとみなされていたことがうかがえる。

女性の生き方として「教育ママ」を批判する論調は、「教育ママ」を政治的関心の低い存在として捉える見方と連座していた。この見方は第Ⅱ期の終わりごろから現れ始める。1972年5月18日の記事「19日の日教組ストこう思う」では、教師のストライキに無関心な母親たちを責め、たて、「今までの教育ママのように、目先のことだけに執着するのではなく、大きな目を開いて」ほしいという教師の意見が寄せられた。同様に1972年5月18日「市販テストの追放」でも、「市販テスト追放運動」が母親の協力を必要とする運動であり、そのために「長年のテスト体制にならされ、テストの点数によって、お小遣いの額を決めているような教育ママを“洗脳”する」必要があると論じられた。また1972年7月9日「三面作戦開始 “市販テスト使わない”」でも、教育ママを説得し、市販テスト反対運動に「戦闘参加」させようとする記事が載った。以上の記事には、母親の政治的関心の低さを問題とし、母親に社会的存在になるよう喚起する意図が込められていたことが看取できる。そしてその方向性は「わが子のため」という狭い願いから脱却し、「すべて子のため」という変心を求めるものであった。

「わが子のため」ではなく「すべて子のため」という変心を求める論調は、集団保育の重要性を述べる記事にもみられる。1971年12月6日の記事「平和ひらく市民外交」では、諸外国の保育制度・教育制度が紹介され、「教育ママ」を「自分の子供のことしか考えない」と批判し、子どもたちが「集団的に育てられた後、大人になったとき、その社会的連帯性は教育ママが一人一人育てた子供たちのそれとは大違いだ」と述べられた。ほかにも1973年12月12日『『こむうむ』ただいま満員 女と子どもの共同体“みずいらず”』では、「子供を過保護にしないために、集団の場に入れることが大切だ」という東京都児童福祉審議会の意見を参考に発足した「こむうむ」（東京・杉並区）の取り組みが紹介された。この団体の目的は、「乳のみ児を抱えて働けない母親や未婚の母や離婚した母親たちが物心とともに助け合っという狙いもあるが、わが子べつたりの教育ママの向こうを張って、というつもりもある」という。「集団の場」での保育が子どもにとって大切だということを確言するために、「わが子べつたりの教育ママ」の子育てを引き合いに出している。以上の記事は、「教育ママ」に対抗する集団保育の優位性を打ち出し、母親の関心が「わが子のため」ではなく、「すべて子のため」に発展することが必要であると申し立てた記事であると解釈できる。

女性の生き方・在り方の観点から「教育ママ」が批判されたが、その一方で母親の教育熱心さが完全に否定されたわけではなかった。むしろ多様な母親のなかに、子どもに無関心で育児放棄をする母親もいることが問題として浮上し、「教育ママ」が良い意味で使われはじめた。若い母親や妻たちに「多種多様の時代の波が打ち寄せて」きたという「戦後っ子バラエティー ヤング・ミセス NOW その生活と意見」（1973年11月9日）には、教育に関心を払わず自分のしたいことをする母親の姿が批判的に描かれた。また1973年4月11日『婦人週間』に当たって思うこと』では、「育児に熱心だと言うことは、母親の自覚がなく、わが子を捨てる若い女性が目立つ風潮の中では賞賛に値する態度だとしなければなるまい」として、母親の教育熱心さを再評価する視点が導きだされた。これらの記事にみられるように、教育に関心を示す母親を良い母親として奨励する論調が増えていった。「教育ママ」と

という言葉も、「よい意味での教育ママ」や「真の教育ママ」というように、良い母親像を提示するために使用されていった。

一例として、1973 年 9 月 3 日「教育ママ志望 内職やめ、子供づきあい」という記事が挙げられる。この記事では、「幼児を三人もかかえて、やりくりはたいへんです。でも下の子を妊娠したのをきっかけに、それまでの内職をきっぱりとやめました。お金も大切ですが、人生にはもっと大切な何かがあるような気がして…」と語る、東京都在住の母親が紹介された。その母親は内職を辞めて、「よい意味での教育ママになる決心」をしたという。彼女は「世間では教育ママを悪人みたいにいいますが、母親としてそうなるのは当たり前ではないでしょうか」と述べ、わが子のためだけでなく近所の子も含めた子どもたちのために、サイクリングやマラソンに付き添ったり、図書館に通ったりと手を尽くしていることが報道された。こうした姿は、「よい意味での教育ママ」の好例として描かれた。この場合に使われた「教育ママ」は、批判の対象ではなく「望ましい母親」として描かれ、母親自身が「教育ママ」であることを誇りに思っている様子が読み取れる。

これまで第 II 期の終わりごろから第 III 期にかけて現れた「教育ママ」言説を分析してきたが、この時期の特徴を以下のように整理できる。「教育ママ」という言葉が新奇性を帯びなくなってきたころ、「教育ママ」ということばではひとくくりには出来ない、母親の多様性が指摘されたこと、母親の生き方への注目から「教育ママ」が批判されるようになったこと、一方で育児放棄する母親に比べて、教育熱心な母親の評価が見直され、良い意味で「教育ママ」が使われる言説も登場したこと、そして子どもを愛情のなかで育て、その愛情を「すべての子のため」にまで広げていく母親があるべき姿として描かれたことが指摘できよう。

6. 結論

本研究の分析によって明らかになったのは、「教育ママ」言説が、時代に応じて母親たちに「良き母親」規範を与えていたことである。「教育ママ」がマス・メディアで誕生した 1962 年頃は、専業主婦となった母親が家庭を自らの城塞として取り締まっていた。家庭という城塞のなかで母親はわが子には高校以上の学歴を身につけさせようと奮闘していた。「教育ママ」言説が流行した 1969 年には、高校進学率は 79.4% となり、ほとんどの青少年が高校へ進学する社会になっていた。そうした状況において母親たちは、わが子の学歴を期待する教育熱心さをいっそう露わにしていたが、それは独善的な心情だとして批判された。ただしこの批判の内実は、母親が家庭のなかで教育に関心を示すこと自体ではなく、「わが子のため」の愛情であったことに留意する必要がある。「わが子のため」に学校教育に関心をもつ母親には「過保護」というレッテルを貼り、あくまでも家庭のなかでしつけを管理する存在に留ませようとしたのである。それは結局、「わが子のため」の愛情を糧に「すべての子のため」の教育に視野を広げる経路を遮断してしまうという、意図せざる結果をもたらした。

たしかに 1970 年代半ば以降になると「教育ママ」言説は、母親の教育熱心さを良い意味で捉え直し、「わが子のため」の愛情を狭窄として「すべての子のため」の愛情に変心した母親を理想像として描く側面も出てきた。しかしながらこの母親像は、一見、母親の社会的な経路を提示しながらも、実際には母親の「わが子のため」の心情を尊重するのではなく否定の形をとっていた以上、理想論でしかなかったと考えられる。「わが子のため」の愛情を独善的だと批判する語り口は、「すべての子のため」を理想的に語っていても、「わが子のため」

に注力する母親たちにはその理想像は受け入れられず、批判を甘受して「わが子のため」の教育に傾斜していくしかなかった。

こうした母親たちの反応は、母親自身が「教育ママ」の社会的なイメージを語ろうとしていることを意味している。言説の草創期である1960年代はじめには、「教育ママ」は批判的な評価しか得られなかった。だが言説が定着していった1960年代後半には、母親たち自身から「教育ママ」という揶揄を受け入れる反応が観察された。批判的な評価を自覚しながらも、それを利用して開き直ったのである。この開き直りは、ついには1970年代になると再評価されることになった。母親たちの教育熱心さが、母親の無関心さに比べて良いものとされ、「教育ママ」言説の意味内容が変容したといえる。

1970年代以降「教育ママ」という言葉が古びた言葉として廃れていった一方で、「教育ママ」言説が示した望ましい母親像は継続して語られた。1980年代の臨時教育審議会答申において「家庭の教育力の低下」という言説が再燃し、2000年代にも家庭教育の重要性が喧伝されるなかで、望ましい母親像は連綿と語られている。もちろんその像は、母親への直接的なメッセージとしては現れておらず、あくまでも家庭へのメッセージとして発されている。しかしながらそのメッセージの中身は、「教育ママ」言説にて反語的に打ち出された母親役割と類似している。たとえば、冒頭で挙げた「つながりが創る豊かな家庭教育」では、「子の教育に第一義的責任を有する」親の役割として、「子どもが基本的な生活習慣・生活能力、人に対する信頼感、豊かな情操、他人に対する思いやりや善悪の判断などの基本的倫理観、自立心や自制心、社会的なマナーなどを身につける」ことが陳述された。

以上、高度経済成長期に誕生した「教育ママ」言説の変容は、高等学校の進学率や女性の就業率の上昇という社会の変化や母親自身の意識の変化と軌を一にしていることが確認された。そうした変容のなかでしだいに忘却されていったのは、「わが子のため」から「すべての子のため」という架け橋である。1960年代に芽生えた「わが子のため」の教育関心は、その関心をエゴイズムとして断罪するまなざしによって、「すべての子のため」の教育関心に有機的につながることはなかった。そのまなざしは、皮肉にも家庭における母親の教育態度だけに向けられ、そもそも子どもの教育がどのような営みであるのかを問い直す契機にはならなかったといえる。さらに言うならば、この母親へのまなざしが、教育責任の個人化に拍車をかけると同時に、母親の教育態度を規定する「良き母親」規範を語る資源となって、現在にまで引き継がれている。

参考文献

- 広田照幸, 1999, 『日本人のしつけは衰退したか——『教育する家族』のゆくえ』講談社現代新書.
- 本田由紀, 2000, 「『教育ママ』の存立事情」藤崎宏子編『親と子——交錯するライフコース』ミネルヴァ書房, 159-82.
- 香川めい・児玉英靖・相澤真一, 2014, 『〈高卒当然社会〉の戦後史』新曜社.
- 神原文子, 2004, 『家族のライフスタイルを問う』勁草書房.
- 宮坂靖子, 1999, 「ジェンダー研究と親イメージの変容」『家族社会学研究』11(11): 37-47.
- 二関隆美, 1971, 「母親の教育態度と子どもとの関連——教育ママの子はどんな子か」『青少年問題研究』19: 1-34.
- 落合恵美子, 1989, 『近代家族とフェミニズム』勁草書房.

- 落合恵美子, 1994, 『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・越えかた』有斐閣.
- 岡本智周・笹野悦子, 2001, 「戦後日本の『サラリーマン』表象の変化——『朝日新聞』を事例に」『社会学評論』52(1): 16-32.
- 重松敬一, 1962, 「親の教師観・教師のおや観」『児童心理』16(7): 68-72.
- 上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店.
- 山田昌弘, 2005, 『迷走する家族——戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣.